

資料館だより

2017.3

- 特別寄稿 -

絵も及ばぬ高潔の人、岡本黄石

二松学舎大学特命教授 加藤 国安

明治の日本にも「杜甫」がいた。そううそぶいたら大詩人には何とも失礼な話であろう。明治の激動期、あたかも杜門とでも称すべきものがあつたかのように、その薫陶を受けた人材が輩出した。漢詩壇に即していえば、岡本黄石(文化8～明治31年)を上げねばならない。名は宣迪、字は吉甫、通称は半介。彦根藩家老の宇津木久純の子で、岡本業常の養子となった。当時、杜甫を宗とする麴坊吟社の主宰者として著名だったが、これまで岡本黄石に関する一般書がなかったこともあって、よく知られた人物とはいいがたい。黄石が改めて注目されるようになったのは、この十数年のことである。きっかけは世田谷区立郷土資料館が、岡本の生家の宇津木家より同館に寄託された宇津木家文書をもとに、『漢詩人 岡本黄石の生涯』(2001)、『同 第二章・その詩業と交友』(2005)、『同 第三章・三百篇の遺意を得る者』(2008)と、続けて特別展及びその図録を刊行したことによる。

黄石について紹介した早いものとしては、清の俞樾(1821～1906)の一文がある。

(□は筆者の補、以下同じ。)

吉甫は彦根の世臣^た為り。是の時、藩国は多故たり。吉甫能く弊政を除くに力め、広く賢才を挙げ、以て幼主を輔け、頗る一時の望を負ふ。諸侯の士を納るるに及び、之を朝に薦むる者有る

も、頭を掉^ふりて顧りみず。居を華頂山下にトし、角巾・野服にて、環堵〔垣根〕は蕭然たり。亦た其の志節を想ひ見るべきかな。少時、曾て梁川星巖の門に遊ぶ。星巖、其の詩を称へて「忠厚惻怛〔傷み愁える〕、愛君愛国、三百篇〔『詩経』〕の遺意を得たり」とす。詩を知る哉、人を知る哉。(『東瀛詩選』卷三十三)

黄石が彦根藩家老となったのが、嘉永5(1852)年、42歳。以後、藩政の重鎮となっていくが、「藩国は多故〔多難〕」にして絶体絶命のさ中であつた。黄石は政治的には師匠梁川星巖譲りの攘夷論者だつた。かくして尊攘派志士や水戸藩との連携を進言したこと、藩主井伊直弼とうとんぜられる身となるが、桜田門外の変で井伊が倒れるや、苦境に立たされた藩政を自ら担う立場へと激変していく。厳しい局面が続いたが、杜甫の詩に学び天下第一を旨として、堅忍不拔の精神で臨み、幼い主君を盛り立て有能なブレーンを任用し、藩論を見定めることに腐心。その結果、戊辰戦争の危機のなか藩内を新政府軍側に取りまとめ、藩が窮地に陥るのを回避することができたのである。

維新後は新政府に推挙する声もあつたが、「頭を掉りて」受け入れなかつた。この決然たる出处進退に、黄石の「志節」の人となりが見える。東京に移り住んだものの、「角巾、野服」の隠士となつ

て、杜甫を宗とする麴坊吟社を起し、日々を詩作に過ごした。詩は主に隠退後に作られたものだが、主君への忠義心、国への深い思いにあふれている。また、同門の小野湖山や大沼沈山らと親交が深く、『黄石齋集』全6集(『詩集 日本漢詩』18/汲古書院、1988、所収)にはその評語が多く掲げられている。星巖評を借りての兪樾の言に「三百篇の遺意を得たり」と称えられる黄石だが、その詩集で強く印象に残るのは、「遺意」の体現者たる杜甫との深い関係である。

『黄石齋集』の序跋もみな、そうした黄石の人となりや詩風について言及する。ちなみにそれぞれの名を掲げるに、第一集一小野湖山・川田剛・谷鉄臣(太湖)・大沼沈山・森春濤・江馬天江、第二集一成島柳北・菊池純(三溪)・鱸松塘・巖谷一六、第三集一宮原潜叟・神山鳳陽・神波即山・石津灌園、第四集一三島中洲・山中猷(静逸)・伊勢小湫・蒲生娶亭、第五集一中村正直・南摩綱紀・大島怡斎・矢土勝之(錦山)、第六集一丁野遠影・森槐南・黎庶昌・孫点(字は君異)ら、錚々たる文士が名を連ねる。この序跋中、最も興味深いのが菊池三溪序である。少し長くなるが現代語に訳して掲げる。

自分がかつて『詩経』[「小雅」六月]を読んで、「文武の吉甫」の箇所[夏の暑い六月、鎬及び方を侵し涇陽まで入って来ていた北西の戒たる獵狃を、西 周末の將軍・尹吉甫の軍が太原まで追放し大功をあげた戦争]に至り諳んずるに、そのうるわしさは清々しい風が吹いてくるかのようだった。繰り返し諷詠しながらこう思ったものだ。「人たるもの必ずや文武を兼ね備えて、この吉甫のように実践せん。それでこそ名士と称されるのだ」と。わが岡本吉甫君はその同輩といえよう。字が同じというだけではない。吉甫は旧彦根藩の古臣で、激動の時勢にあい政務に参与する身となったが、軍議の合間に文藻をこととされるような御仁である。[文武兼備という面においてもかの吉甫と同じなのである。]

序は、文武両道の代名詞ともいべき周の尹吉甫と、岡本吉甫たる黄石とを同列に並べて語り始

める。まずは文の面からこういう一。

かつて梁川星巖翁に詩業を受けたことがあった。梁川翁はその才能を大いに高く評価し、一門の高弟と認めた。これにより吉甫の詩名は、隠然として三都に鳴り響くこととなった。余は平安京に住んでいたため、詩酒の席で招き招かれ合いし、もったいなくも知遇を忝くすること、かれこれ八年になる。その詩風はおおむね老杜を尊崇し、かつ百家に出入りし、高古・典則なる〔気高くて俗気がなく、典範のごとき格式がある〕こと、優に古人の域に至っている。

当時の漢詩壇の領袖・梁川星巖に高く評価され、詩名もすこぶる上がったという。その作風は杜甫を祖とし、かつ百家に通じていた。華やかな称賛に包まれてこの上なきかに見えたが、その黄石自身おのが詩業への悩みを持っていて、菊池三溪にこう打ち明けたという一。

ある日、吉甫が余にいうには、「それがしかつて詩業を梁川〔星巖〕翁に受けたことがあるが、ただ齢もまだ弱冠にすぎず、お側に従っていたのも三四年程度。国は多事多難となり、公務も多忙。身なりも構わず不作法どころか、本を読み諳んずる暇もなかった。これで斯文に従事したといえようか。」余はいった「それが詩の勉強なのです」と。

序は、黄石の発問、それへの三溪の返答という形がしばらく続く。まず梁川星巖翁から受けた教えがとても短い上に、仕事が忙しくてまともに勉強をしていないことを追懐しての第一の問い。これに対し三溪は「それが詩の学業」なのだと応ずる。

またいうことには、「アメリカの使節が横暴な振る舞いをして、江城の膝下で盟約を結ぶよう要求するため、過激な徒が横行して反乱を起し、東は防禦、西は討伐と家でゆっくりする間もない。とても鼻や鬚を撫でさすったり〔思案〕する暇などなかった。これで斯文に従事したといえようか。」余はいった「それが詩の勉強なの

です」と。

次は武の面から、米国との騒乱下で十分詩作に取り組んでいないことを懐旧しての第二の問い。ここでも三溪は「それが詩の学業」と繰り返す。

こうもいう、「幕府軍が西討した際には、それがしも鎧をまとい武器を取り、しばしば矢や弾丸の中をかいくぐり、我ながら必死だった。とても悠々と人生を全うする暇などない日々だった。これで斯文に従事したといえようか。」余はいった「それが詩の勉強なのです」と。

さらには国内の争乱に巻き込まれ、文人らしいことは何もしてこなかったと振り返る。多事多難の中、自らの詩業の不徹底を恥じ入るのである。この間の黄石の思いを凝縮したのが、中村敬宇の第五集序で、「翁は昔、彦根藩の大夫にして、多事の時に遇ひ、多事の任に当たり、多事の人と為るも、多作の詩は世の知る所なり」という。多忙に明け暮れていたからと躊躇する黄石の第三の問い。しかしと三溪は断言する。「それこそが詩の勉強」の王道なのだ。そしてその理由をこう説く。

「そもそも詩とは人情・世外のことであり得ましようか。ですから老杜の詩もみな実際に起きた出来事を詠んでいるのです。もしそれを粗略に学び軽率に講じたりすれば、たとい梁川翁に一生従事したとて、何ものし得ないと私は思います。」吉甫はうなづいてそうだと云った。

ここまで三溪に言われてやっと思悟が生まれたようだ。多くの師友への感謝の返礼という気持ちもあつただろう。かくして自作の詩を世に送り出す決心がついたのである。

吉甫は今これまでの作品を世に問わんとされている。そこで余に冒頭に題せよとのことである。余いわく、「お二人の吉甫ともうるわしいばかりで、清々しい風が吹いてくるかのようである。昔の吉甫の偉業は、かつての周にその名をほしいままにした。今の吉甫は当世に名誉を馳せている。地位や大小に違いはあるが、そのうるわしさは同一である」と。

この三溪序は、どこまでも高潔な黄石の風貌を眼前に蘇えらせてくれるような文章である。以下、「其の詩、工みならざらんと欲するも、豈に得べからざらんや」（前掲、中村序）という、その朴訥な詩風を一瞥してみよう。

まず「歳暮雑感、傲老杜同谷県七歌之体」（歳暮雑感、老杜の同谷県の七歌の体に倣ふ／以下、『黄石齋集』第一集 卷上）其一にいう、

男児墜地不徒死
一片丹心照青史
吾今三十名未立
千仞五嶽蟠胸裏
君不見行潦自有帰海時
豈到白頭長爾只
嗚呼一歌兮歌始発
天寒魚龍不出窟

男児 地に墜ちて 徒らに死せず
一片の丹心 青史を照らさん
吾 今三十にして 名未だ立たず
千仞の五嶽 胸裏に蟠る
君見ずや 行潦も 自から海に帰する時 有るを
豈に白頭に到りて 長き爾 只ならんや
嗚呼 一歌す 歌始めて発せば
天寒くして 魚龍 窟を出でず

杜甫の「乾元中寓居同谷県作歌七首」（乾元中、同谷県に寓居し、歌を作る七首）にならったもの。男子として生まれたからには、無駄に死ぬことはできぬ。この真心でもって歴史に名をとどめん。今はまだ三十歳で〔天保 11 年(1840)、井伊直弼が彦根藩主になる前〕、「名未だ立たず」だが、胸にはあの「五嶽」のごとき高峰の志を秘めている。君見ずや、「行潦」〔路上の濁水〕も、いつかは大海に注ぐ時のあることを。どうして白髪になるまでただ無為に過ごしてよかろうぞ。ああ第一の歌よ、最初の歌を起こさん。天もまだ寒いゆえ、魚龍は窟をはずにわだかまっている。一困難な時世に立ち向かい、それをわが身に引き受けていこうとする強い意志がみなぎっている。この「行潦」だが、杜甫「三川にて水の漲るを觀る二十韻」の「自ら窮 岫〔興深い峰〕の雨多く／行潦は相

脛 蹙す[激しくぶつかり合う]を、また末尾の「嗚呼一歌兮歌始發」は、杜甫「同谷県作歌」其二の「嗚呼二歌す 歌始めて放てば／閭里 我が為に色惆悵す」の上句を踏まえている。

続けて黄石の「歳暮雜感」其三。

王風一廢三千年
詞賦楚騷幾變遷
唐代始雖復于古
李杜之輩僅數賢
滔滔頽波及今日
厭聞衆作等噪蟬
嗚呼三歌兮歌彌激
大雅之音何日作

王風 一たび廢れて 三千年
詞賦 楚騷 幾たびか變遷す
唐代始めて古に復すと雖も
李杜の輩 僅かに數賢
滔滔たる頽波 今日に及び
聞くを厭ふ 衆作の噪蟬に等しきを
嗚呼 三歌す 歌 彌いよ激し
大雅の音 何れの日にか作らん

詩衰えて三千年。幾度もの変遷があったが、その中で激しく鳴った者に李白・杜甫がいる。が、その衣鉢を継ぐ者はわずか。大雅の文学ははたしていつ甦るのかと。大沼枕山は、「頽波 今日に及ぶも 能く挽回する者莫し。大雅の音を作すは、其れ君の任ならんか」と、日本での漢詩復興を黄石に託すのだった。黄石の詩には大義を基とする樸直な気骨がある。それが愈越も感じ入った「三百篇の遺意を得る」(川田剛『黄石齋集』第一集 卷上の序に引用される梁川星巖の評)者の意である。

次々と襲いくる危機。それからいかにしてこの国と民を守るか。黄石の胸に去来する悲憤慷慨の情。其四にはこういう(節録)、

永保乾坤遂無事
安知殺運被西洋
頻年吞噬肆凶虐
有似狂秦逞虎狼

永保の乾坤 遂に無事
安んぞ知らん 殺運の西洋を被ひ
頻年 吞噬して 凶虐を 肆にするを
狂 秦の虎狼を 逞しくするに似る有り

永遠なる山河は決して滅びはせぬ。どんなに西洋が殺気に支配され、かの狂秦のような凶虐をわが国に加えようとも一。杜甫の義憤がそのまま日本に移入したかのような、悲壮な言辞。されば小野湖山の評語にいう、「悲歌慷慨、真に是れ老杜の遺響、近人の集中に無き所なり」と。

また其六にいう、

世運滔滔物情奢
淳樸風喪競紛華
国用不足日一日
加之比年歳荒多
举世人心皆姑息
不知天意竟如何
嗚呼六歌兮歌洵切
杞憂之人淚垂血

世運 滔滔として 物情奢り
淳樸の風喪はれて 紛華を競ふ
国用の足らざること 日一日
之に加へて 比年 歳荒多し
世を挙げて 人心 皆 姑息
知らず 天意 竟に如何なるかを
嗚呼 六歌す 歌 洵に切なり
杞憂の人 涙 血を垂らす

今、世の中から純朴の風は失われ浮薄を競うばかり。日々、財政は不足となり、毎年の不作も深刻だ。人心は姑息、天意は一体いずこに。歌を歌えば血のような涙が垂れてくると。枕山の評語にいう、「君の藩 樸にして富むも、猶ほ此の憂有り。他藩は知るべし」と。杜甫が一千年後の日本に生まれていたら、やはりこういう詩を絞り出しただろう。黄石の胸中には蓬萊の地で甦ったかのような杜甫が棲んでいて、その言葉を日々の糧のように反芻していたのである。

また、「九日感懷」(『黄石齋集』第一集 卷上)

では 重陽ちょうよう の日の思いをこう詠む。

暮雨秋風慘満城
失群孤雁喚愁鳴
比年生意傷存没
毎度重陽憶弟兄
往昔来今同一夢
雲流水逝共無情
只須酌此黄花酒
暫解中腸百感榮

暮雨 秋風 惨として城に満ち
群れを失ひし孤雁は 愁さけひを喚び鳴く
比年 生意 存没を傷み
毎度ちょうよう 弟兄を憶ふ
往昔 来今 一夢を同じくし
雲流れ 水逝き 共に無情
只だ須すべからく此の黄花酒を酌み
暫く中腸の百感の榮はるを解くべし

秋の暮れ、雨も風もの悪天候。街を覆う悲しい気分。群れからはぐれたな雁の叫び。その年ごとの境遇の中で人の生死を傷み、この日がくる度に兄〔大塩平八郎に殺された宇津木静区〕と弟〔郷里彦根の房之介〕のことを思い出す。古今往来、見るのはいつも同じ夢。時間が無情に過ぎゆくのみ。ただ菊酒を酌み、しばし憂いを解き放たん。—これに対する枕山の評語は「重陽こうたつの佳律にして、老杜を継ぐ者は、唯だ高適こうたつ夫しんしやう（高適）有るのみ。〔黄石の〕此の律は之に神肖す」とある。悲愴の調べで杜甫「重陽」に継ぐのは高適だが、この黄石詩はそれにそっくりだと。高適の詩はワイルドで自虐的なほど悲壯感を押し出すますらお風だが、黄石のはその種の大上段とは少しく異なる。ただ逆境の中の悲憤の高調には、「神肖」ともいえるものが確かにある。

次に、「己巳之冬閑居無慘追次陶靖節飲酒二十首韻録十二」（己巳の冬、閑居して無慘〔頼りなく寂しい〕なれば、陶靖節〔陶淵明〕の「飲酒二十首」の韻ついでに追次し、十二を録す）其六（『黄石齋集』第

二集 卷二）を見てみよう。

細閱杜陵集
文章絶代英
雄潤仍悲壯
都原忠愛情
譬如鯨鼓鬣
波瀾大海傾
又似彼天籟
吹万自然鳴
読了忽自失
教人永嘆生

細えつかに閱どりようしゆうす 杜陵集
文章 絶代の英
雄潤 仍お悲壯にして
すべて忠愛の情に原づく
譬うれば 鯨ひれの鬣こを鼓こし
波瀾もて 大海の傾くが似し
又 彼の天籟の
万を吹きて 自然の鳴るに似たり
読了すれば 忽ち自失し
人をして永嘆を生ぜしむ

己巳は明治2年、黄石59歳の作。杜陵集〔杜甫の詩集〕を子細に読むと、絶世の作の感がする。雄潤・悲壯の言葉はすべて忠愛の心から発せられたもの。ああ、自分の心は大波で揺さぶられるよう。譬えれば、鯨のヒゲが一震えするだけで大海が傾くがごとく、また天来の風が万物を吹いて様々な音を発するがごとくである。詩集を読了するや、茫然としてただ長いため息をつくばかり。

「鯨の鬣を鼓し 波瀾もて 大海の傾くが似し」は、杜甫「翰林張四学士垣に贈る」の、「翰林 華蓋に逼り、鯨力 滄溟を破る」、同「短歌行、王郎司直に贈る」の、「鯨魚 浪を跋みて滄溟開く、且く劍佩を脱して徘徊するを休めよ」等と関連する。黄石の「永嘆」が眼に浮かぶ。

しかし、政治の第一線を退いて隠士となった黄石は、「正月十八日梅莊に遊ぶ」（『黄石齋集』第二集 卷下（60歳））の中で、「濺がず 杜陵の憂国の涙〔国を憂うことなどもう致しますまい〕と、うそぶくのである。

入春幾日故陰連
忽覚今朝淑気宣
鳩杖去拖残雪路
梅莊来占嫩晴天
唯将白髮投詩内
賸有青山到酒辺
不濺杜陵憂国淚
看花聴鳥且游延

春に入りて幾日ぞ 故陰連なるも
忽ち覚ゆ 今朝 淑気の宣しきを
鳩杖 去き拖く 残雪の路
梅莊来り占む 嫩晴の天
唯だ白髪をもって 詩内に投じ
賸るに青山有りて 酒辺に到る
濺がず 杜陵の憂国の涙
花を看 鳥を聴き 且く游延す

立春を過ぎててもなお寒さが続くが、今朝の天気はとてもいい。早速杖をつけて残雪の道をたどり、梅莊へきて柔らかな日射しを一人占め。そして白髪を身をもつて詩中に没頭させるだけ。たまたま青山の景色にいざなわれて酒屋まで来た。だが、杜甫の憂国の涙はもうそそがない。ただ花を看、鳥の声を聴き、しばらく心を遊ばすのみ。

「春望」詩の陰鬱を反転させて詠んだもので、一見穏やかなつぶやきにも見えるけれども、本人をよく知る周囲はそうは受け取らなかった。そこに黄石の内奥に秘められた寂寥を読解したのが大沼枕山だった。その評語にいう、「君 傷時 憂国の人為り。然れども世運の然らしむる所、其の成功する能はざるを知る。是に於いて看花聴鳥の人と為る。其の間 暗かに杜陵の涙を濺ぐ者なり」と。

黄石の杜甫尊崇は、ただ慷慨調に終始したわけではなかった。隠退後の日々の暮らしの中でふと垣間見せる穏やかな詩情にも、また杜甫の調べが寄り添う。

「寿永井介堂七十次向山黄村韻」
僻境従容善保身
古稀重見太平春
時招野老閑談日

敢向都門漫趁新
富貴功名成往夢
烟霞水石養吟神
為君移贈杜陵句
錦里先生烏角巾

「永井介堂の七十を寿ぎ、向山黄村の韻に次す」
僻境 従容として 善く身を保つ
古稀 重ねて見る 太平の春
時に野老を招き 閑かに旧を談じ
敢へて都門に向かひ 漫ろに新を趁ふ
富貴 功名 往夢と成り
烟霞 水石 吟神を養ふ
君が為に移贈せん 杜陵の句の
錦里先生 烏角巾の中を

『黄石齋集』第六集 卷二所収(75歳)。田舎はいい、ゆったりして養生にいい。古稀を迎えて、また太平の世を見るとは。時々、野老と静かに昔話、また都城の新たな世相のよもやま話も。富や浮名は過去の夢、霞や谷川が今の宝。あなたの祝いに杜甫の句を贈らんと。一この杜詩とは「南隣」詩をさす(訳詩のみ掲ぐ)。

錦里先生烏角巾
園收芋栗不全貧
慣看賓客兒童喜
得食階除鳥雀馴
秋水纔深四五尺
野航恰受兩三人
白沙翠竹江村暮
相送柴門月色新

お隣の錦里先生 黒い頭巾の隠士殿
菜園で芋栗採れるし 貧しくあなし
お子らは来客慣れし 余を喜び
雀らも人様おそれず きざはし間近に啄んで
秋の川 深さわずか四五尺じゃ
小舟にや 二三人乗りがやっこさ
白い沙 翠の竹 江べの村の夕まぐれ
家まで送ってもろたら 上り来よるよ月影が

黄石のたどり着いた穏やかな心境に、心和む思

いがする。乱世の中、信念を貫くべく杜甫を心の師と仰いでいたが、太平の世となってもまた杜甫とともにある。その深い縁に、えも言われぬものを覚えないわけにはいかない。

「暮秋山村用老杜秋野詩韻」

山村甘寂寞 野屋養清虚
倦鳥投烟樹 帰牛下夕墟
嫩蔬時自摘 荒畝使僮鋤
適有溪翁貺 銀梭潑刺魚

「暮秋の山村、老杜の〈秋野〉詩の韻を用ふ」

山村 寂寞に甘んじ、野屋 清虚を養ふ
倦鳥は 烟樹に投じ、帰牛は 夕墟を下る
嫩蔬 時に自から摘み、荒畝 僮をして鋤かしむ
適たま溪翁の貺有り、銀梭 澆刺の魚

『黄石齋集』第六集 卷四(77歳)の一首。山里の村はもの寂し、野の茅屋も人気なし。鳥はねぐらの木立に帰り、牛も夕べの丘を下りて行く。時には自分で軟らかな野菜を摘み、荒れた畝は童僕に鋤かす日々。そこへ溪川に住む翁がやって来て、ぴちぴちの銀鱗の魚を差し出した。

杜甫の「秋野」と同様、自家菜園の野菜に溪流で採れた魚も添えて、人生の憩いの園が描かれる。わが「日本の杜陵」の目元には、いつしか穏やかな村人の柔和さが漂うようになっていく。第六集に序を寄せた駐日公使・黎庶昌もこういう、「一日、(黄石が)余の使署を訪ふ。角巾・藤杖にして鬚髪は皓然たり。儀度〔礼儀の度合い〕、甚だ偉見〔立派〕の者にして、驚きて神仙中の人と為す。図画も速ばざる所なり」と。絵も及ばぬ高潔なる神仙の人、黄石一。まことにかくありなんと思われるような筆致であることよ。

最後に、黄石の杜甫への思いを端的に詠んだ「論詩二十首」其二(『黄石齋集』第四集 卷下〈67歳〉)を掲げる。

詩亡二十四名興
歴代相沿奏技能
集大成之杜陵老
焰光万丈比昇恒

「論詩二十首」其二
詩亡びて 二十四名興き
歴代 相沿ふて 技能を奏す
集大成の杜陵老ゆるも
焰光 万丈 比び昇ること恒なり

詩経が亡んで後、二十四家の詩人が勃興し、各時代ごとにそれぞれの技を披瀝してきた。それらを集大成した杜甫の作品は、どんなに遠い過去のものになろうとも、焰は万丈の高さにまで並び連なり、いつまでも立ち昇り続けている。一末尾の句は、かの韓愈の「李杜 文章在り、光焰 万丈長し」(「張 籍を調ける」)に基づくもの。かくして明治の漢詩壇における杜門の長ともいべき岡本黄石は、明治31年(1898)、88歳でこの世を辞し、井伊家の菩提寺たる世田谷区の豪徳寺に葬られた。自らが杜甫に献じた句、「焰光 万丈 比び昇ること恒なり」とともに…。

参考に、明治漢詩壇の巨頭・森槐南の岡本黄石評を掲げておく(『黄石齋集』第六集 卷六「諸家評」明治二十三年晚秋作)。

昔、韓愈は「險奇」をもって、白居易は「平易」をもって杜甫に学んだ。李商隱の「宏麗」も黄庭堅の「苦澁」も、杜少陵の作風によったものである。各々その一端を得ることはこのようであった。杜詩の大いなる様は、長江・黄河が万古変わらず滔々と流れるがごときである。

黄石先生は現代の風雅の領袖でおられ、つねに人を導くに杜甫に学ぶよう説かれた。先生の詩が格調があり氣力が重厚で、かつ柔和・温雅で威儀を感じさせることは、すでに周知の事実である。この頃、第六集が刊刻されたので拝読するに、心は益ます平らかに気は益ます和やかに、才も益ます収斂して韻律も益ます細やかになっておられる。

小生は、先生が杜甫を学ばないようできてよく学んでいることに敬服するばかりである。最近は何の家々も杜甫の詩集を学ぶが、概して上っ面に止まっている。先生とは何と異なっていることか。明の李・王ら古文辞派の徒は、模擬・剽窃をもって杜甫に学んだが、先生のあり方はそういうものから遠く隔たっておられる。

28年度 主要事業報告

特別展

国重要文化財指定記念「野毛大塚古墳展」	10月25日(火)～12月4日(日)
---------------------	--------------------

企画展・季節展

季節展「螢とさぎ草伝説」	6月25日(土)～7月31日(日)
季節展「ボロ市の歴史」	12月13日(土)～平成29年1月29日(木)

歴史講座

講座名及び実施日	講師	参加人数
民俗学入門講座(全5回) 5月10日～6月7日の毎週木曜日	恵津森智行(当館学芸員)	延149人
漢詩漢文鑑賞講座(全5回) 5月12日～6月9日の毎週火曜日	村山吉廣(早稲田大学名誉教授) 重野宏一(筑波大学大学院生)	延215人
夏休み親子香道教室 5月17日～6月14日の毎週木曜日	公益財団法人お香の会	41人
美術史講座「世界遺産の仏教美術～日本Ⅱ」(全6回) 11月6日～12月11日の毎週日曜日	山田磯夫(早稲田大学教授) 村松哲文(駒澤大学教授) 金子典正 (京都造形芸術大学教授)	延246人
近世文書解読入門(全8回) 29年1月28日～3月25日の毎週土曜日	武田庸二郎(当館学芸員)	
美術史「豪徳寺と浄真寺～その歴史と文化」(全4回) 29年2月7日～2月28日の毎週水曜日	鈴木泉(当館学芸員)	
やきものの見方(全4回) 29年3月3日～24日の毎週金曜日	高杉尚宏(当館学芸員)	

野外歴史教室

コース名	実施日	講師	参加人数
次大夫堀周辺を歩く	5月18日(水)	恵津森智行(当館学芸員)	21人
荏原台古墳と等々力溪谷を歩く	5月27日(金)	高杉尚宏(当館学芸員)	雨天中止
吉良氏の旧蹟を訪ねる 一世田谷地域	11月11日(金)	鈴木泉(当館学芸員)	雨天中止

◀新収集資料▶

○寄贈資料(寄贈者敬称略)

小泉満智子(宇奈根)
書幅・画幅・扁額など一括

養原泰彦(喜多見)
東京オリンピック関連資料27件・
『柳田國男と考古学』

○購入品

岡本黄石筆 草書五言絶句「月夜問梅」(其三・其四・其六・其七・其九・其十・其十一)

田辺十郎右衛門筆記「大祓祝詞(三十一日のお伝え)」

旧武蔵国荏原郡池尻村名主橋本家文書

武蔵国荏原郡池尻村未年御年貢可納割付(元禄十六年)・申歳年貢可納割付(享保元年)・惣家数并商家書上帳(寛政元年)ほか、全7点

資料館だより	No. 66
発行年月日	平成 29年 3月 31日
編集発行	世田谷区立郷土資料館 〒154-0017 世田谷区世田谷 1-29-18
	☎ 03-3429-4237
	FAX 03-3429-4925

広報印刷物登録番号 1464